

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業 (文学士)
- 1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (国史学)
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学 (国史学)
- 1989年4月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)
- 1991年4月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)
- 1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
- 1994年4月 東京大学文学部助教授 (日本史学)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)
- 1997年2月 博士 (文学) 取得
- 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交、近代日本の天皇制、満州事変・上海事変期の帝国議会議事録を読む、1930年代の史学史

c 概要と自己評価

専門は日本近現代史で、1930年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、加藤陽子、『この国のかたちを見つめ直す』、毎日新聞出版、2021.7
- 共著、半藤一利・加藤陽子・保阪正康、『太平洋戦争への道 1931-1941』、NHK出版、2021.7

(2) 論文

- 加藤陽子、「南原繁の終戦工作と、その射程」、『思想』、1160、6-15頁、2020.12
- 加藤陽子、「コロナ禍の世界からみる国家と国民の関係の変容」、歴史学研究会編 中澤達哉、三枝暁子監修『コロナ時代の歴史学』、70-79頁、2020.12
- 加藤陽子、「行政改革 (1996-1998) と日本学術会議」、『学術の動向』、vol.26 no.11、71-81pp、2021.11
- 加藤陽子、「現代日本と軍事研究 日本学術会議で何が議論されたのか」、『世界』、no.951、86-97頁、2021.12

(3) 書評

- 山本貴光、吉川浩満、『その悩み、エピクテトスなら、こう言うね』、筑摩書房、『毎日新聞』、2020.4
- 小山俊樹、『五・一五事件』、中央公論新社、『毎日新聞』、2020.5
- なつかしい一冊、『見る前に跳べ』、新潮文庫、『毎日新聞』、2020.7
- 杉本恭子、『京大的文化事典』、フィルムアート社、『毎日新聞』、2020.8
- 藤野裕子、『民衆暴力』、中央公論新社、『毎日新聞』、2020.9
- 渡部泰明、『和歌史 なぜ千年を越えて続いたか』、角川選書、『毎日新聞』、2021年1月9日、今週の本棚頁、2021.1
- 波多野澄雄、『「徴用工」問題とは何か 朝鮮人労務動員の实態と日韓対立』、中公新書、『毎日新聞』、2021.2
- 麻田雅文、『蒋介石の書簡外交 上下』、人文書院、『毎日新聞』、2021.5
- 益田肇、『人びとのなかの冷戦世界』、岩波書店、『毎日新聞』、2021.7
- 富田武、『日ソ戦争 1945年8月 棄てられた兵士と居留民』、みすず書房、『ロシア史研究』、no.107、75-82pp、2021.12

国立歴史民俗博物館 性差の日本史展示プロジェクト編、中央公論新社、劉慈欣、『新書版 性差の日本史』、『少女たちの戦争』、『円 劉慈欣短篇集』、インターナショナル新書、中央公論新社、早川書房、『毎日新聞』、2021.12

(4) 解説

加藤陽子、『劇曲平和』を読むー日本と日本人をいかに世界に表象するかという問いー、後藤新平案、平木白星稿
『後藤新平の劇曲 平和』、15-42 頁、2020.8

加藤陽子、『解説「日本と中国の過去と未来を考えるための通史」江口圭一『十五年戦争小史』、ちくま学芸文庫版
解説、377-385 頁、2020.10

加藤陽子、『解説 多層的な歴史を文学の力で描く人』、奥泉光『雪の階』上・下（中公文庫、2020 年）、414-425 頁、
2020.12

(5) 学会発表

国内、加藤陽子、池田嘉郎、中澤達哉、小澤弘明、福士由紀、「コロナ禍の世界が映した「神なき国」の近代と「社会」、
WINE 緊急オンライン対談会 新型コロナウイルス感染症と国民国家／ナショナリズム、2020.6.27

国内、加藤陽子、「「科学・技術」研究を育む政治文化とは何かー日本学術会議「軍事的安全保障研究」に関する検討
資料を読む」、大阪歴史科学協議会大会 2021 年、オンライン、2021.6.12

国内、加藤陽子、書評 富田武『日ソ戦争』、ソビエト史研究会、オンライン、2021.6.19

(6) 啓蒙

加藤陽子、「近代史の扉 コロナ禍めぐる対立」、『毎日新聞』、2020.4

加藤陽子、「近代史の扉 天賦人權論への確信こそ」、『毎日新聞』、2020.5

加藤陽子、「近代史の扉 歴史書くには文脈が必要 議事録の意義」、『毎日新聞』、2020.6

加藤陽子、「近代史の扉 国民感情と検察権力」、『毎日新聞』、2020.7

加藤陽子、『劇曲 平和』（後藤新平案／平木白星作）を読む 日本と日本人をいかに表象するかという問い、『後藤
新平の会 会報』、No.22、18-23 頁、2020.7

加藤陽子、「歴史になぜ学べないのか」、『読書新聞』、2020.7

加藤陽子、「近代史の扉 歴史見直し 消極的な日本 「復元ポイント」をめぐる」、『毎日新聞』、7 面、2020.8

加藤陽子、「近代史の扉 「手ごわい歴史観」への洞察示せ 対露外交、賢明だったか」、『毎日新聞』、9 頁、2020.9

加藤陽子、「近代史の扉 「人文・社会」統制へ触手 [学術会議「6 人除外」]」、『毎日新聞』、2020.10

加藤陽子、「近代史の扉 日本側が磨いた学問の自由 [学術会議の自律性保障]」、『毎日新聞』、2020.12

加藤陽子、「近代史の扉 危うし「ボトムアップ型」科学 [学術会議「再定義」のもくろみ]」、『毎日新聞』、2020.12

加藤陽子、「近代史の扉 神話の国で「自分の木」を思う [天皇のありかた熟議のとき]」、『毎日新聞』、2021.1.23、オ
ピニオン頁、2021.1

加藤陽子、「近代史の扉 内外への深い洞察 根底に [無し 許されぬ「五輪プラン B」]」、『毎日新聞』、2021.2

加藤陽子、「近代史の扉 権力篡奪へ「正当性」まとう [議会への暴力]」、『毎日新聞 朝刊』、オピニオン面 9 頁、2021.3

加藤陽子、「近代史の扉 決断は最高度の慎重さ基に [危機の時代、長期消耗戦回避へ]」、『毎日新聞』、2021.4

加藤陽子、「近代史の扉 焦燥感より冷静な「構想」 [新型コロナと対中戦略]」、『毎日新聞』、2021.5

加藤陽子、「近代史の扉 世論が政府の姿勢「変えた」 [学術会議問題の政治過程]」、『毎日新聞』、2021.6

加藤陽子、「近代史の扉 財政上の適切さを問い続けよ [それでも、日本人は「五輪」を選んだ]」、『毎日新聞』、2021.7

加藤陽子、「近代史の扉 外部から調達される危機 [「人ごと感」漂う日本]」、『毎日新聞』、2021.8

加藤陽子、「近代史の扉 行革、どこで誤ったか [官邸は暴走し国民は自宅「療養」]」、『毎日新聞』、2021.9.18、オピ
ニオン欄、2021.9

加藤陽子、「近代史の扉 [謀略と世論] 政治家を葬ろうとした旧陸軍」、『毎日新聞』、2021.10.16

加藤陽子、「近代史の扉 [衆院選を振り返る] 人々の合理的選択を取り込め」、『毎日新聞』、2021.11

加藤陽子、「近代史の扉 東京五輪の下で何が生まれたか [安吾の言葉で振り返る今年]」、『毎日新聞』、2021.12.18、
オピニオン欄

(7) マスコミ

「こういうときこそ本を読もう」、『週刊読書人』、2020.5.1

「非公開の軍法会議で何が争われていたのか」、オンライン版『二・二六事件東京陸軍軍法会議録』パンフレット、丸
善雄松堂、2020.7.26

「知の航海のために必須の羅針盤」、教文館、2020.8.25

「オピニオン&フォーラム 任命拒否する政権 インタビュー」、『朝日新聞』、2021.7.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、青法協大阪支部、「今と未来を幸せに生きるための歴史教室 憲法と近代史の間」、2021.6